

研究ノート

ガーナ国立舞踊団 (Ghana Dance Ensemble) における
舞踊の練習に関する考察相原 進ⁱ, 遠藤 保子ⁱⁱ

ガーナ国立舞踊団にて行われている基本動作やウォーミングアップに関わる練習では、1人の舞踊家がリーダーとなり、リーダーの号令や太鼓のリズムに合わせて、リーダーと同じ動作を他の舞踊家たちも行う。練習の内容はリーダーによって毎回異なり、太鼓のリズムも毎回異なったものが演奏される。2014年2月と2015年8月、筆者らはガーナ国立劇場にて練習風景の映像を収録し、練習のリーダーを担った舞踊家に対し、練習内容についての聞き取り調査を行った。また、2014年2月、2014年8月、2015年8月、同年11月に舞踊団のディレクターに対し、練習内容および、練習が舞踊団において果たしている機能について聞き取り調査を行った。調査を通じて明らかになったことは、第1に、練習には基本動作やウォーミングアップの要素に加え、左右のバランスを重視する発想が取り入れられていること、第2に、練習を通じてジェスチャーや炊事など日常動作への自覚を深められること、第3に、練習のリーダーとなった舞踊団員が自らの技法や指導力をアピールするとともに、舞踊団員が互いの技法を取り入れあう場にもなっているということであった。

キーワード：練習、舞踊、ガーナ国立舞踊団 (Ghana Dance Ensemble)、基本動作、ウォーミングアップ、日常動作

はじめに

ガーナ国立舞踊団では、基本動作やウォーミングアップのための練習が行われている。練習では、1人もしくは少数の舞踊家がリーダーとなり、リーダーの号令や太鼓のリズムに合わせて、リーダーと同じ動作を他の舞踊家たちも行う。練習内容はリーダーによって異なり、太鼓のリズムも毎回異なったものが演奏される。

本研究では、ガーナ国立舞踊団にて行われている

練習に着目し、調査をもとに練習内容について考察を行う。2014年2月6日、筆者らはガーナ国立劇場にて行われた練習の映像を収録した。そして2014年2月6日と7日、ガーナ国立劇場内において、リーダーを担った舞踊家に対し、収録した映像を視聴しながら、練習の中で行われたさまざまな動作について、①各動作の名称、②各動作の内容、③各動作の目的、④舞踊団において練習が果たしている機能について聞き取り調査を行った。さらに、2014年2月、2014年8月、2015年8月、2015年11月には、筆者らの調査結果と考察を国立劇場舞踊部門ディレクターに説明した上で、それに対する意見を求める形で聞き取り調査を行った。

今日のガーナは、急速な経済発展と情報化の中で、

i 立命館大学非常勤講師

ii 立命館大学産業社会学部教授

欧米の文化が流入し、娯楽も多様化したことで、伝統的な舞踊が踊られる機会が減少しつつある。そのような社会状況の中で、舞踊を保存・伝承していくことが重要な課題となっている(遠藤他 2013)。そこで筆者らは、モーションキャプチャなど最新のテクノロジーを用いて、舞踊のデジタルデータの保存や解析を行うことを通じて、舞踊の保存・伝承に寄与することを目指した研究を継続してきた。

また、ガーナでは1957年の独立以降、ガーナ大学を中心に、個々の舞踊演目の指導に関する研究や教材開発が行われてきた(Agordoh 1994)。今日でも、個々の舞踊演目の教育に関する研究は継続されている(Young 2013)。しかし個々の舞踊演目に関する研究が進む一方で、本研究が対象としたような基本動作やウォーミングアップに関わる練習については、先行研究でまったくと言っていいほど触れられていない。舞踊の保存と伝承において基本動作やウォーミングアップに関わる練習は重要であるはずなのに、これまでその内容が検証されることはなかった。

よって、基本動作やウォーミングアップに関わる練習についての調査と考察を行うこと自体が先駆的であり、本研究を通じて、ガーナにおける舞踊の保存と伝承に資することができるのが、本件研究の意義であると考えられる。

1. 先行研究

ここでは1957年のガーナ独立以後の、舞踊を主な研究対象としたものを取り上げることにする¹⁾。ガーナの舞踊の社会的位置や歴史的背景に関する先駆的研究は、1990年代にヨンゲ Young などのガーナ人研究者によっていくつか行われている(Young 1992)。これらの研究では、ガーナの舞踊演目における舞踊動作、音楽、歴史的・社会的背景についての解説や、結婚式や葬式、リーダーの就任式、子供のお披露目式²⁾など、コミュニティにおける重要な儀式的場において、舞踊が重要な役割を果たすことが紹介されている。

また、本研究の筆者らが行ってきた研究においては、21世紀以降、急速に経済発展を遂げたガーナの社会変化を背景とした、舞踊の社会的位置の変化について触れており、本来はコミュニティにおいてその構成員によって行われていた舞踊が、専門の舞踊家によって行われるようになったことや、専門の舞踊家の活動実態を明らかにしている(遠藤他 2013)。

本研究に関わる社会的背景として、ガーナにおける文化政策と舞踊との関わりについても触れておく必要がある。この点に関しては、ガーナの独立と、初代大統領であるクワメ・エンクルマ Kwame Nkrumah による文化政策の理念と切り離すことができない。1957年、ガーナは西アフリカにおいて初めて植民地からの独立を達成する。後に詳述するが、本研究における調査を実施したガーナ国立劇場は、1962年、ガーナ文化委員会(Ghana National Commission On Culture)により開設された。また、同年には、エンクルマ主導でガーナ大学に舞踊・音楽・演劇学科(School for Music, Dance, and Drama)が設立された。

学科設立当時の理念や目標については、オポク Opoku による著書において明確に示されている(Opoku 1965)。オポクは、舞踊・音楽・演劇学科の目標として「占領期に失われたガーナの舞踊・音楽・演劇の質と経験を取り戻す」ことを挙げている。しかしその一方で、新しい要素を取り入れることについても積極的な姿勢を示している点は注目すべきである。オポクは、植民地下でのキリスト教の影響や欧州文化の流入には批判的だが、ガーナ独立以降については、技術や経済などの社会的背景の変化に伴ってガーナ人自らが自発的に舞踊を変化させることについては積極的に肯定している。また、そのような変化にともなって既存の舞踊の指導方法が変化することや、新しい指導方法が生まれることについても肯定的に捉えている。

また、筆者らは、先に挙げた研究において今日のガーナにおける文化政策にも触れている(遠藤他 2013)。エンクルマは、政治においてはクーデター

で失脚することになった。しかし今日のガーナにおける文化政策においては、エンクルマたちの、自発的な変化と進取を肯定的に認める理念が受け継がれていることがわかる。

独立後の文化政策の一環として始まった舞踊教育は、舞踊を学ぶ者、教育する者に対し、楽譜や資料集など、教育現場の必要に応じて、必要な教材を提供する形で行われてきた (Agordoh 1994)。しかし本研究が対象とする基本動作やウォーミングアップに関わる練習については、先行研究ではまったくと言っていいほど触れられていない。ただ、練習に着目したという点では、本稿執筆者の遠藤が、ナイジェリア国立舞踊団における調査を通じて、舞踊団員の生活時間の中での練習の位置を示したことが先駆的であると言える (遠藤 2011)。

練習についての先行研究が行われなかった理由として、第1に、舞踊の研究者の関心は、個々の舞踊演目に向けられており、その前段階である練習については関心が低かったものと推察される。そして第2に、国立劇場舞踊団のように高度な技法を要した舞踊団が、練習の公開に消極的であったことが挙げられる。たとえば本研究では、ディレクターの特別許可を得て、練習風景の収録や、練習についてのインタビューが可能となった。しかし、その許可を得るまでに筆者らは1年の交渉期間を要している。また、先に述べたようにガーナの舞踊では自発的に新しい要素を取り入れることを肯定している。そのため、練習内容には舞踊団における最新の舞踊技法の動向が反映されており、技法の流出や、練習が誤って伝えられる可能性を考慮して部外秘とされているものと思われる。

2. ガーナ国立舞踊団 (Ghana Dance Ensemble)

先に述べたとおり、1962年、ガーナ文化委員会によりガーナ国立劇場が開設された。国立劇場には「舞踊」「演劇」「音楽」の三部門が存在する。これら

のうち舞踊部門に関する活動を行っているのがガーナ国立舞踊団である。

練習内容の記録を行った2014年2月の時点では、舞踊団には11名の男性舞踊家、13人の女性舞踊家、8人の音楽家が在籍している。これらの団員数は上限が決められており、欠員が生じた場合のみ新規の募集を行う。新規の団員を募集する際は、ガーナ全土に告知し、書類審査による1次選考と3か月間のインターンによる2次選考の後、すべての団員の協議を経て、新規採用される者が決定する³⁾。

舞踊団は、国立劇場での定期公演や、政府などの行事での出張公演を行っており、日本、イギリス、ドイツなど世界各地での国外公演も成功させている。また、私立小学校から委託されている教育事業、政府の行事などでの出張公演、テレビ番組の演出や出演など、その活動は多岐に渡っている。

本研究で着目する練習に関して、舞踊団では午前8時30分から9時30分まで基本動作とウォーミングアップに関わる練習を行い、休憩をはさんで9時45分から12時まではパートごとに分かれた練習や、劇場での公演に向けた練習などを行う。午後の練習は、13時30分から15時までである。練習内容の大枠は上記のようになっているが、出張公演など、さまざまな事情により練習内容や時間が変更されることもある⁴⁾。基本動作とウォーミングアップに関わる練習では、リーダーが毎日交代することになっており、団員全員にリーダーの機会があるという仕組みになっている。この理由について、国立劇場舞踊部門ディレクターのニー・テテ・ヤーティ Nii-Tete Yarteyによると、すべての団員に対し、年齢や性別に関わらず、自らの指導力や技法をアピールする場を等しく与えるためにリーダーを毎日交代させているとのことである。

3. 調査内容・結果

2014年2月6日午前8時30分より9時30分まで、国立劇場内の練習場にてビデオカメラを用いて舞踊

団の練習を収録した。そして2014年2月6日と7日、各日とも午後12時から午後1時まで、国立劇場内にて、収録した映像をもとに、6日の練習のリーダーとなった調査対象者L⁵⁾に対する聞き取り調査を実施した。対象者Lは2014年2月当時のトップダンサーの1人であり、公演でのセンターポジションなど重要な役割を担っており、2014年3月に行われた舞踊団の公演「BUKOM」では主役となっている。

聞き取り調査は、対象者Lとともに映像を見ながら、練習の中で行われたさまざまな動作について、①各動作の名称、②各動作の内容、③各動作の目的を聞き、さらに対象者Lが各動作について解説を行うという方法で進められた。また、ディレクターのヤーティに対し、2014年2月と2015年8月の職務開始前の午前7時30分から8時30分まで国立劇場において、さらに2015年11月に筆者らが実施した日本への招聘事業内において、対象者Lへの聞き取り調査

の結果とそれに関する筆者らの考察を説明した上で、それに対する意見を求めるという形での聞き取り調査を行った。なお、2013年までは舞踊団の練習は原則として外部には非公開のため、筆者らは見学を許可されたのみで調査や記録を行うことはできなかったが、前述したようにディレクターのヤーティの協力により記録や聞き取り調査を行うことが可能となった。

2014年2月6日に行われた練習に関して、各動作の所要時間と動作の内容について、対象者Lへの聞き取り調査をもとに時系列に沿ってまとめたものが「表1」である。表中の「No.」は動作を順番ごとにナンバリングしたものであり、「所要時間」は各動作に要した時間、「動作の内容」は、各動作の詳細および、各動作の名称や、各動作のもとになった舞踊などについての解説も含んでいる。

表1 対象者Lによる練習内容

No.	所要時間	動作の内容
対象者Lが前に立ち、対象者Lと他の団員が、鏡写しの状態で向き合う隊形になってから練習を開始する。対象者Lが英語で「One, Two, Three……」とゆっくり号令をかけ、他の団員も、対象者Lの動作と号令に合わせて同じ動作を行う（動作No.08まで同様）。伴奏音楽などは使わない。		
01	3:18	ストレッチとウォーミングアップのための歩行動作を行う。 対象者Lはこの動作を、エウエ Ewe 語で「ZON-MIZDO (Walk and Let's go)」と名付けている ⁶⁾
02	0:22	ストレッチのために足を前後左右に蹴り出す。 対象者Lは各動作について、ガ Ga 語で「SHI-SE (Push it back)」「SHI-OHIAN (Push it front)」「SHI-BEKU (Push it right)」「SHI-DRON (Push it left)」と名付けている。
03	1:57	跳躍により体の硬直を解くための動作を行う。 対象者Lはこの動作を、ガ語で「TUUN (Jump)」と名付けている。
04	1:46	ストレッチとバランストレーニングを兼ねた、腕をゆっくりと両側に広げる動作を行う。
05	1:43	ストレッチとバランストレーニングを兼ねた、腕をゆっくりと前後に動かす動作を行う。
06	0:32	前後左右に腰をストレッチする動作を行う。 対象者Lはこの動作を、ガ語で「OHE (Waist)」と名付けている。
07	1:14	腕と脚をストレッチする動作を行う。
08	4:03	舞踊への導入動作を行う。リラックスした直立姿勢で両足のかかとを付け、左右のつま先を外側に向けて屈伸を行った後、足を広げて屈伸を行う。その後、再び両かかとを付けた状態に戻り、屈伸を行いながら、「One, Two, Three」の号令で屈伸を3回、「Four」で足を各方向へ出す動作を行う。「Four」での足を出す動作は片足ずつ、1つの方向ごとに行う。右足は前、右、後ろ、左足は前、左、後ろへ出す。
09	1:06	動作 No.05 (腕のストレッチ) をもう一度行う。

<p>練習場のコーナーへ移動し、練習場内を対角線上に歩きながら動作を行うための位置に付く。以後の動作は、練習場を対角線上に移動しながら行われる。音楽家たちの太鼓の伴奏が始まる⁷⁾。対象者Lは他の団員と同じ方向を向き、先頭に立って各動作の見本を見せる。動作の内容について質問があった場合、対象者Lはそれに答える。その後、他の団員が同じ動作を行う。Lは少し離れた位置で他の団員の動作を見る。団員が動作を行っている最中に、対象者Lが声をかけることは無い。</p>		
10	7:17	動作 No.01と No.05の動作を歩きながら行う。
11	2:40	舞踊「ウォンゴ WONGO」や、舞踊「ナグラ NAGLA」から取り入れた動作を、歩きながら行う。この動作は、前かがみ(コラップス)の状態で行われる。 ここでの「ウォンゴ」の動作では、左手を腰に当てながら、右手をまっすぐ、右斜め下、左斜め下へと交互に伸ばす。その後、両手を大きく広げ、足を広げながら左右への移動を行う。 「ナグラ」の動作では、ひじを外側に向け、拳を胸の位置に持ってきた状態から、腕全体を上下に動かす動作を行う。足は、ひざを交互に高く上げながら前進する。この動きは、牛や馬の脚の動きを模している。
12	1:11	手は「ウォンゴ」、足は「ナグラ」の舞踊動作を歩きながら行う。 ここでの「ウォンゴ」の動作は、手の平を上に向け、ひじを曲げて両手を前方に差し出すような形を維持するという内容である。 「ナグラ」は動作 No.11と同様、ひざを高く上げながら前進する動作である。
13	1:21	対象者Lが独自に考案した動作。ひじを外に向けたままの状態、肩を後方から前方に波打たせるようにしながら腕を前に出す。この動作を歩きながら行う。 対象者Lは、「ナグラ」を再構成しつつ、舞踊「アバジャ ABAJA」の動きにも近くなるようにこの動作を考案したとのことである。 対象者Lは、この動作を「YES」と名付けている。
14	2:04	ガーナの伝統的な主食である「バンクー BANKU」を作る際の、棒状の杵を両手で持って臼で穀物をすり潰す作業をもとにした動作を、歩きながら行う。ウォーミングアップと日常動作への意識を強くすることを目指している。
15	1:49	舞踊「アバジャ」の動作の一部と、動作 No.14を歩きながら行う。ここでの「アバジャ」では、胸の前で平行にした両腕を回し、かき混ぜるような動作をする。
16	1:34	動作 No.14と No.15を行い、最後に舞踊「バマヤ BAMAYA」の動作を行う。最後の「バマヤ」では、つま先立ちになって体全体を上へ伸ばしつつ、腰を左右に素早く1回ずつ振る動作を行う。これら一連の動作を歩きながら行う。
17	0:57	動作 No.3と No.14を歩きながら行う。
18	1:17	動作 No.3の後、「相手を右足で前方に蹴り、倒れた相手を両手に持った武器で刺して殺す」という、短いストーリーを持った動作を行う。一連の動作を歩きながら行う。
19	1:01	相手に疑問を投げかける際の、両手を広げるジェスチャーをもとにした動作を行う。動作 No.18のストーリーに続いて、殺される側が、両手を広げ、「なぜ私を殺すのか?」と相手に疑問を投げかけるというストーリーがある。この動作を歩きながら行う。対象者Lはこの動作を「WHY?」と名付けている。
20	3:13	動作 No.19、動作 No.18、「アバジャ」の一部、動作 No.14、「バマヤ」の一部の順に動作を行う。「アバジャ」は動作 No.15、「バマヤ」は動作 No.16にて行ったものと同様である。これら一連の動作を歩きながら行う。
21	4:08	練習場内の各コーナーに、6~7人ずつ、4つに分けたグループを配置する。グループごとに対角線上に歩きながら動作 No.20を行う。
22	1:10	各コーナーに分かれた4つのグループが、練習場の中心に向けて同時に歩きながら動作 No.20を行う。中心に集まった後、神への祈りと感謝を示すために、両手を上にかざす動作を行う。
<p>終了後、そのまま15分間の休憩時間に入る。ダウン(整理運動)は行わない。団員は、各自、自由に休憩時間を過ごす。水分補給を行う者もいれば、追加で柔軟運動などを行う者もいる。また、会話や携帯電話を触るなど、この時間を娯楽に充てる者もいる。</p>		

4. 考察

調査結果をもとに、ここでは練習について3つの観点から考察を行う。第1の観点は、この練習ではウォーミングアップや基本動作を行うということである。舞踊団では早朝から練習を行うため、練習での各動作を通じ、全身をほぐして血行を促進することを目的としている。よって練習では、「動作 No.01」では歩行、「動作 No.03」では跳躍というように、静かな動作に始まり、少しずつ動きの激しいものになっていく。

また、「動作 No.11」は、伝統的な舞踊である「ウォンゴ」と「ナグラ」の動作を取り入れている。この動作では足の動きが「ナグラ」、腕の動きが「ウォンゴ」であり、2つの舞踊動作を複合したものとなっている。「ナグラ」は牛や馬など蹄のある動物の足の動きを模した舞踊で、「ナグラ」での足の動きはガーナの舞踊における基本的な動作の1つであるため、対象者Lは、これらの動作を練習に取り入れたとのことである。

また、対象者Lの練習内容にはバランスを重視する発想が取り入れられている。たとえば「動作 No.02」では、前後左右に足を蹴り出すような動作を行う。対象者Lによると、練習で行う動作では、足を前に出した場合は後方にも出し、右に出した場合は左にも出し、さらに同様の動作を右足と左足の双方で行うといったように、両足もしくは両腕を、前後左右に等しく動かすようにしているという⁸⁾。同様の特徴は「動作 No.08」などにも見受けられる。

第2の観点は、日常動作を練習に取り入れているという点である。ジェスチャーや家事といった日常生活に関わる動作を練習の中で行うことを通じて、舞踊家たちは日常動作について意識的になり、日常動作に対する認識を深めることができるという。たとえば「動作 No.14」は、ガーナの主食のひとつであるバンクーを調理する際、原料のヤマイモを石臼で磨り潰す動作をもとにしつつ、そこに体を左右に

振るような動作を加えることによって考案された動作である。また、「動作 No.19」は、相手に疑問を投げかける際に両手を広げるジェスチャーをもとにしている⁹⁾。

第3の観点は、舞踊団における練習が果たす機能についてである。舞踊団では、毎日、練習のリーダーが交代することになっている。練習の場において、リーダーをすることで自らのリーダーシップや身体能力をアピールすることができる。そのため、この役割を団員全員が持ち回りで行うことにより、全員が等しくチャンスを得られることになる。また、それぞれの団員が独自に考案した練習を行うことにより、他の団員が、新たな技法を学ぶことにも繋がっている。たとえば「動作 No.05」は、もともと男性舞踊団員Cの練習において行われていた動作であるが、対象者Lはこの動作の有効性を知り、自らの練習に取り入れたとのことである。

先行研究の中で触れたように、ガーナの舞踊においては、自発的に新しい要素を取り入れることを肯定している。そのため、舞踊団では、各団員がさまざまな動作を練習に取り入れつつ、互いにその技法を共有しあっているものと考えられる。また、2015年8月行った調査では、団員によっては、ガーナ由来の技法に加え、インドのヨガの要素などを練習に取り入れていることも明らかになっている。

これらの調査結果と考察について、筆者らはディレクターのヤーティに対し説明を行い、それに対する意見を聞くことにした。筆者らの調査結果と考察について、ヤーティが注目した点の1つめは、練習を通じて団員どうしが技法を向上させているということである。それについて「舞踊団では多くの団員がガーナ全土から集められているため、練習を通じて、団員が各自の舞踊言語 (Dance language) を向上できる」と述べた。

2つめにヤーティが注目したのは、対象者Lが練習に日常動作や舞踊の基本動作を取り入れているということであった。この点に関して、ヤーティは「ガーナの舞踊や哲学は、農作業などの日常の動き

や、自然からの影響を受けている。そのため、舞踊団員が各自の日常動作や自然に対する認識を増すことは重要である」と述べている。対象者Lの練習では、「動作 No.14 (バンクー)」や「動作 No.19 (WHY?)」が、日常動作への認識を深めることに役立っている。また、「動作 No.12 (ナグラ)」は動物の動きを模した舞踊であるため、自然に対する認識を深めることにも通じているとのことである。

3つめにヤーティが目にしたのは、練習が、舞踊団員各自に等しくチャンスを与えることに繋がっているということであった。ヤーティによると、舞踊団では年齢や性別などに関わらず、全員が等しくチャンスを与えられており、練習もその一環であると述べている。このことを象徴的に表すものとして、ヤーティは、25歳の女性をコレオグラファーとして採用していることを挙げている。

また、チャンスという点では、舞踊団では各自の意見を言い合う場が設けられている。筆者らは、2015年8月31日の午前中の練習の終了後、舞踊団の福利厚生や待遇について話し合う場にて参与観察を行った。話し合いでは、舞踊団のポジションに関係なく、各自が互いの意見を交わすことができる。このような話し合いは毎週1回行われており、内容次第で20分程度で終わることもあれば、3時間を越えることもある。ヤーティによると、この話し合いは、すべてのメンバーに等しく発言のチャンスを与えるための場であるという。ヤーティは、練習で各舞踊団員が等しく技法をアピールしあうチャンスを設け、さらに話し合いの場で舞踊団員が各自の意見を遠慮なく言える機会を設けることを通じて、舞踊団はひとつになれると述べている。

おわりに

調査を通じて明らかになったことは、第1に、練習には準備運動の要素に加え、左右のバランスを重視する発想が取り入れられていること、第2に、練習を通じてジェスチャーや炊事など日常の動作への

自覚を深められること、第3に、練習のリーダーとなった舞踊団員が自らの技法や指導力をアピールするとともに、練習を通じて舞踊団員どうしが互いの技法を取り入れ合っているということであった。

本研究の今後の課題は2つある。第1に、今回調査した練習の中で、床に座ったり、床に手を着いたりする場面が存在しなかったことについてである。これまで筆者らは、アフリカ各地の舞踊団の練習を見学する機会があったが、これまで1度も、床に接する練習を見たことがない。ガーナでは、地面は先祖の霊と交感できる場でもあるので地面に触れることの意味は大きい(高根・山田編 2011)。しかし練習にそのような場面がなかったことについて、今後も研究を継続する。

第2に、舞踊団における身体観を明らかにすることである。舞踊の練習において、身体観は重要な意味を持つのだが、ガーナの舞踊における身体観に関する研究は行われていない。よって今後、国立劇場やガーナ大学の関係者への聞き取り調査や資料研究を通じて、身体観について明らかにしていく¹⁰⁾。

本研究は、ガーナ国立劇場舞踊部門ディレクター、ニー・テテ・ヤーティの多大な協力と理解によって成立したと言っても過言ではない。この研究を機に、他のアフリカの国々におけるトップクラスの舞踊団の練習を記録し、関係者への聞き取り調査を行うことを通じて研究成果を蓄積しながら、アフリカ各地における練習内容の向上に資する研究を目指すとともに、アフリカにおける身体観の把握へと繋げていくことを目標としたい。

謝辞

本研究は、2013年度立命館大学研究推進プロジェクト(代表:遠藤保子)、2014年度、2015年度立命館産業社会学会研究助成金の助成を受けて行われました。また、本研究に関わる調査では、ガーナ国立劇場舞踊団ディレクターのニー・テテ・ヤーティ氏をはじめ、多くの団員の方々からのご協力を得ました。この場を借りて御礼申し上げます。

註

- 1) ガーナ独立以前の舞踊についての文献記録は、古くは1812年に出版されたポウディッチによる滞在記“Mission from Cape Coast Castle to Ashantee, with a statistical account of that kingdom, and geographical notices of other parts of the interior of Africa”などがある。2015年11月現在、書籍のスキャンデータと全文のテキストデータを、ピッツバーグ大学図書館が運営するウェブサイトにおいて閲覧することができる。
- 2) 子供のお披露目式は、ガーナでは英語でアウト・ドアリング (Out-dooring) と呼ばれる。また、ガ人ではこの儀式のことを「クポジーモ Kpojiemo」と呼んでいる (Younge 2013)。子供が生後3カ月から半年くらいの時期に、子供をコミュニティの人々に披露することを通じて、コミュニティの人々と共にその子供を育てていくことを確認し合う、お祝いの場である。
- 3) ガーナ国立劇場舞踊部門ディレクターのニー・テテ・ヤーティによると、2015年11月の時点では男性団員が1名減ったので欠員が出ており、2016年に新規採用のテストを行う予定とのことである。
- 4) 2014年8月および2015年8月から9月にかけて行った参与観察では、舞踊団は政府関連行事、民間から委託された結婚式や葬儀での出張公演の他、テレビ番組への出演や番組出演者への演技指導も行っていった。そのため、チームを2つ以上編成して1日に2、3箇所での公演などを行うことも珍しくなくなっており、本文中で書いたような練習を予定どおり行えたのは1週間のうち2日か3日程度であった。
- 5) 男性舞踊家、2014年2月時点で38歳。音楽家の家庭に生まれ、国立舞踊団に14年間在籍したが、調査から約半年後、日本へ移住したことにより舞踊団から退団した。
- 6) 対象者Lは、動作のいくつかに、エウエ語、ガ語など、ガーナの各民族の言語で名前を付けている。舞踊団では、たとえば「エウエ人の結婚式で出張公演を行う場合はエウエ語を使う」といったように、公演内容に合わせて言語を使い分けている。そのため、舞踊団員はガーナで使われている様々な言語に通じている。
- 7) 太鼓の伴奏の内容については、演奏家に任せるのが通例となっている。対象者Lは太鼓奏者でもあるので伴奏の内容を演奏家たちに指示することもできるが、調査日に行われた練習では、伴奏の内容についての指示をしていない。
- 8) 対象者Lによると、これはバランス感覚を養うための訓練であると同時に、両側のバランスを取ることでヒーリングの効果を得ているとのことである。ただ、対象者Lは「体の右側を打撲した場合、左側にも衝撃を与えることで痛みを緩和できる」と述べており、このような方針の医学的根拠は不明である。
- 9) 対象者Lは、聞き取り調査において、この動作は日常動作であることのみを指摘している。しかし1960年代に作られ、2014年時点でもガ人の若者に人気がある演目「クパンロゴ KPANLOGO」でも同様の舞踊動作が見られる。この動作も、相手に疑問を投げかける際に両手を広げるジェスチャーを元にしてている。
- 10) ガーナ国立劇場やガーナ大学舞踊・音楽・演劇学科の設立に、初代大統領エンクルマの理念が反映されていることは先に述べたとおりであり、すでに、エンクルマの文化政策の理念に関する研究は行われている (Botwe-Asamoah 2005)。しかしエンクルマは舞踊家ではなく、舞踊の教育や上演に直接関わった人々の身体観を解明することが重要であると考えられる。

参考文献

- Agawn, K., (1995) *African Rhythm - A Northern Ewe Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Agordoh, A.A., (1994) *Studies in African Music Revised Edition*, Ghana: Ho New Age Publication.
- Bame, B.N., (1991) *Profiles in African Traditional Popular Culture: Consensus and Conflict Dance, Drama, Festival and Funerals*, CLEAR TYPE PRESS INC., New York.
- Botwe-Asamoah, K., (2005) *Kwame Nkrumah's Political-Cultural Thought and Politics: An African-Centered Paradigm for the Second Phase of the African Revolution*, London: Routledge.

- Bowdich, E., (1819) *Mission from Cape Coast Castle to Ashantee, with a statistical account of that kingdom, and geographical notices of other parts of the interior of Africa*, London: J. Murray. (= University of Pittsburgh Library System, <https://archive.org/details/missionfromcapec00bowd> 2015年11月21日閲覧)
- Fusu, K., (1999) *Festivals in Ghana*, Kumasi: Amok Publications.
- Glass, B., (2007) *African American Dance - An Illustrated history*, North Carolina: McFarland & Company, Inc., Publishers.
- Opoku, A. and Bell W., (1965) *African Dances - A Ghanaian Profile Pictorial Excerpts from Concerts of Ghanaian Dancers*, Legon: Institute of African studies University of Ghana.
- Schauert.P., (2015) *Staging Ghana: Artistry and Nationalism in State Dance Ensembles*, Bloomington: Indiana Univ Press.
- Younge, P., (1992) *Musical Traditions of Ghana - A Hand book for Music Teachers and Instructors of West African Drumming*, Legon: APR.
- Younge, P., (2013) *Music and Dance traditions of Ghana - History, Performance and Teaching*, North Carolina: McFarland & Company, Inc., Publishers.
- 遠藤保子 (2005) 「アフリカの舞踊研究」『体育学研究』50(2), 日本体育学会, 東京: 163-174.
- 遠藤保子 (2011) 『舞踊と社会—アフリカの舞踊を事例として—』文理閣, 京都.
- 遠藤保子・相原進・高橋京子編著 (2013) 『無形文化財の伝承・記録・教育—アフリカの舞踊を事例として—』文理閣, 京都.
- 高根務・山田肖子編著 (2011) 『ガーナを知るための47章』明石書店, 東京.
- 寒川恒夫 (1991) 「スポーツ人類学の連載にあたって」『学校体育』4月号, 東京: 78-80.
- 川田順造 (1999) 『アフリカ入門』新書館, 東京.
- シーガル, ロナルド: 富田虎男監訳 (1999) 『ブラック・ディアスポラ—世界の黒人がつくる歴史・社会・文化』明石書店, 東京.
- 塚田健一 (1999) 「アフリカ」柘植元一・塚田健一編『はじめての世界音楽』音楽之友社, 東京: 19-40.
- 塚田健一 (2000) 『アフリカの音の世界 音楽学者のおもしろフィールドワーク』新書館, 東京.
- Ghana National Commission On Culture*, Ghana National Theatre, <http://www.ghanaculture.gov.gh/> 2015年11月23日閲覧.

Research Note

A Study of Dance Practice in the Ghana Dance Ensemble

AIHARA Susumuⁱ, ENDO Yasukoⁱⁱ

Abstract : The Ghana Dance Ensemble utilizes a type of practice that has elements of basic training and warming up. In this practice, one dancer becomes a leader, and other dancers make the same movements as him (or her) on command or following drumming. The contents of this practice differ according to each leader, and different rhythms are played every time. In February 2014, August 2014 and August 2015, we carried out research at the Ghana National Theatre. In this research, we recorded the Ensemble's practice as a movie, and we used a questionnaire survey to ask the leader about the contents of his practice. Also, in February 2014, August 2015 and November 2015, we used the same method to ask the director of this group about the contents and functions of the practice. Through this research, we discovered three points. Firstly, the practice has several aspects. One is warming up, and others include balance training. Secondly, through this training, the dancers can pay attention to the daily movements of their gesture, cooking and so on. Thirdly, the leader can exhibit his techniques and leadership in the practice. And through this practice, the members can learn dance techniques from each other.

Keywords : practice, dance, Ghana Dance Ensemble, basic movement, warming up, daily movement

i Part-time lecturer in Ritsumeikan University

ii Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University